

# 「阿波踊り」における「女踊り」の確立と「女の男踊り」の台頭

小林 敦子

This research examines the emergences of two styles of Female Dance and Male Dance, and a segment of female dancers who are dressed in male clothing and dance in Male Dance style within Awa Odori. Awa Odori, a Bon dance festival in Tokushima City, attracts 1.3 million spectators each year. The research clarifies how and why the dance styles emerged within Awa Odori, originally a freestyle dance. For the research, issues of the Tokushima Shinbun (newspaper) were examined, Awa Odori performances were observed, and Awa Odori group chiefs were interviewed.

First, it was found that content creators such as photographers, writers, and so on were attracted by advertising imagery geishas, and female dancers known for their youth, beauty, and sexuality, contributing to the emergence of the Female Dance in the 1960s. Next, the fashion trend of short skirts in the latter 1960s shook off the taboo against women's public exposure of body. Several Awa Odori groups produced Female Dance with Happi Coat segments, which became popular among both spectators and female dancers, and contributing to the emergence of the Female Dance with Happi Coat. Awa Odori has evolved into a group dance involving dancers of several established styles and formations. The perspective of discourse providers and necessity of several styles and segments in Awa Odori as a formative dance have contributed to the emergence of these two new styles and the new segment.

## I. はじめに

「阿波踊り」<sup>1</sup>は徳島市中の盆踊りであり、年間約130万人の県外客を誇る観光名物である。一定の様式が認められる「男踊り」および「女踊り」の2種類があり、「男踊り」は外輪、「女踊り」は内輪の対称的な動作の足運びとなっている。新聞および雑誌において各々の踊りにつく形容句も、「男踊り」には「自由奔放」や「豪放」, 「女踊り」は「優雅」や「しなやか」であり、対比的な踊りとされている。また女性が「ハッピ」あるいは「着流し（男性用浴衣）」を着て「男踊り」の動作で踊る「女の男踊り」が、近年着目されている。

しかし戦前の「阿波踊り」は様式化された踊りではなく、自由な乱舞であり、男女差も特になかった。「女踊り」は戦後新たに出現した様式であり、以前は男女ともに現在の「男踊り」に近い動作で踊っていたとされる。本論では、男女差が希薄であった「阿波踊り」において、「女踊り」という

新たな所作の踊りが1つの様式となり、このため従来の踊りが「男踊り」とされ、さらに「女の男踊り」が着目され台頭した経緯と要因を明らかにする。

「阿波踊り」の動作の変容に関しては一般に流布した雑誌等で散発的に記されてきた。一方、学術的視点から記されたものとして、川内（2006）による、戦後の「女踊り」の動作の変遷の論文があるが、「女踊り」の確立および「女の男踊り」については触れられていない。そこで本研究では、文献調査およびフィールド調査（表1）を実施し、「女踊り」がどのように確立し、また「女の男踊り」が誕生・台頭するに至ったのか、その経緯と要因の考察を試みる。以下、論を進めるにあたり、出典は括弧内に著者名、出版年、頁を記し、文末にまとめて「引用文献」として記載する。年号は西洋暦とするが、必要に応じ和暦を併用する。インタビュー内容を記載した場合は、括弧内に表1の該当する番号を記載する（例：[1], [2], …）。

表1 フィールド調査

	年月日	調査内容	調査地
[1]	2013.8.12-15	「徳島市阿波おどり」視察	徳島市紺屋町他
[2]	2014.10.17	「阿波踊り講座」参与観察および参加者（連*には所属していない徳島市民）へのインタビュー	ふれあい健康館** （徳島市）
[3]	2015.7.21	「娯茶平」公演鑑賞および連長へのインタビュー	阿波おどり会館***
[4]	2015.7.22	「のんき連」公演鑑賞および連長へのインタビュー	阿波おどり会館
[5]	2015.7.23	「新のんき連」公演鑑賞	阿波おどり会館
[6]	2015.7.24	「天水連」公演鑑賞および連長へのインタビュー	阿波おどり会館
[7]	2015.7.25	「ゑびす連」連長への電話インタビュー	
[8]	2015.9.11	T氏（元「新のんき連」所属 / 「阿波踊り」歴約50年 / 「男踊り」・鉦担当）へのインタビュー	徳島市内
[9]	2015.11.15	「東京新のんき連」練習の観察およびインタビュー	セシオン杉並****
[10]	2016.1.11	「うずき連」公演鑑賞および連長へのインタビュー	阿波おどり会館
[11]	2016.1.12	E氏（元「ほんま連」所属 / 「阿波踊り歴」約60年・笛・鉦・太鼓・「男踊り」担当）へのインタビュー	徳島市内
[12]	2016.1.12	「阿呆連」練習観察および連長へのインタビュー	徳島市内
[13]	2016.8.15	S氏（元「葵連」所属 / 「女踊り」・「女ハッピー踊り」担当）へのインタビュー	徳島市内

\*連：「阿波踊り」のグループ，\*\*ふれあい健康館：健康増進および文化活動のための徳島市営施設，\*\*\*阿波おどり会館（徳島市新町橋）：阿波踊り関連の展示および公演を行う施設（2009年 徳島市設置），\*\*\*\*セシオン杉並（東京都杉並区）：区民活動の場として使用される区営複合施設。

表1の付記：公演観察では、特に「男踊り」、「女踊り」、「女の男踊り」の動作の特徴に着目した。インタビューは半構造化インタビューにより行った。現役の連長には各連の歴史、踊りの特徴、「女ハッピー踊り」の有無等について聴取した。「阿波踊り」歴の長いT氏およびE氏には、特に1970-80年代と現在の「阿波踊り」との相違について伺った。

## II. 盆踊りの観光政策と「阿波踊り」の変容の概要

### II-1. 昭和初期までの徳島市中の盆踊り

江戸時代城下町であった徳島県徳島市は四国の東端に位置し、神戸・大阪・京都・紀州との交流が盛んであり、上方文化の影響が大きい。徳島藩が藍作を奨励したために、藍が重要な商品作物として徳島の経済を潤した<sup>2</sup>。藍商人は商取引のために各地から来た商人を花街で接待し、この藍商の経済力に支えられた花街は大正期において「盆踊りの主役は富田町、内町、秋田町三検番の芸妓娼妓の総出であろう。」（松本 1980：31）と言われる程に徳島城下の盆踊りの隆盛に寄与していた。

一方で身分や年齢差を超えて老若男女が楽しめるのが盆踊りであり、「阿呆踊り」や「馬鹿踊り」と呼ばれていた。それは、「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らぬ損々」という囃子詞を叫びながら、通りのあちこちから数人から数十人の集団が練歩きながら踊っていたこと、また踊りの動作が、「踊人は双手を挙げ一種奇妙なる舞踏をなし」（加藤 1894：14-15）と記される特徴があったことによる。作家中野好夫（明治末期から大正期に徳島市在住）も「全市が突如として狂乱熱欄のルツポに一変する」（中野 1985：74）と記しているように、一般庶民の熱狂にも支えられていた。こ

のため明治期に日本において民俗的慣習が下品とされ、地域により盆踊りが禁止された時も、戦争や伝染病による一時的な中止以外は、徳島市において廃止されることはなかった（三好 1980：226 / 下川 2011：216）。昭和初期までの「阿波踊り」では、賑やかなお囃子と両手を挙げ振り踊りながら歩くという特徴以外は、踊りの様式などに特に規定はなかったと考えられる。

徳島県全体の経済的基盤であった藍産業は、明治末期になるとドイツから輸入される安価な化学染料におされ衰退した。徳島市中の盆踊りを観光名物にしようという昭和初期の政策には、活気と経済力を取り戻したいという意向があったと考えられる。

### II-2. 観光政策

観光政策が本格的に開始されたのは、1929（昭和4）年である。前年の昭和天皇御大典の祝賀踊りの盛り上がりを受けて、商工会議所は「阿波踊り」を観光資源として売り出そうと、大々的に宣伝に乗り出した（坂東ほか 2007：32）。宣伝活動だけではなく、1931（昭和6）年には秋田町遊廓・南廓取締事務所に審査所が設けられ、「一等米一俵以下の賞品を団体賞と個人賞に審査員が適当に区分し三日間の踊り終了後その成績を発表して交

付。優勝旗は即時全部漏れなく贈呈する」ということが行われた（三好 1980：235-236）。さらに1936（昭和11）年には、市内6カ所以上に審査場が設けられ、5つの審査基準（1. 服装は古典的のもので整備したもの 2. 三絃鳴り物の充実したもの 3. 踊り方の統一したもの 4. 踊と鳴物と服装がピッタリ調和したもの 5. 踊りの団体は十名以上として大衆的なものであること）が示された（『徳島毎日新聞』1936.8.29）。観光政策の中で本論と特に関連する規制は、異装の禁止、すなわち男性の女装および女性の男装の禁止である<sup>3</sup>。また県外イベントには芸妓キャラバン隊が派遣された。このように観光政策においては、芸妓および花街の関係者が重要な役割を果たしている。

### II-3. 現在の「阿波踊り」

現在の「阿波踊り」の特徴を、表2に示す。観光政策がとられてから約90年後の現在は、組織的な祭りとなっている。踊り手が集団ごとに行進す

る形式は変わらないが、以前は三味線を中心としたお囃子演奏者と踊り手が入り乱れて乱舞していた。現在は「男踊り」および「女踊り」の2種の様式が確立し、連によっては「女ハッピー踊り」（女性がハッピーを着て「男踊り」を踊る）および「ちびっこ踊り」（小学生以下の男女）と呼ばれるパートを構成し、パートごとや複数のパートを組み合わせる様々なフォーメーションを組んで踊る<sup>4</sup>。

踊りの所作をみると「女踊り」では遊脚を高く蹴り上げ両手も高く挙げて踊るが、「男踊り」では低い姿勢を保ち、両者是对比的なシルエットとなっている（写真1, 2, 3）。足運びも大きく異なり、「男踊り」では足を大きく外輪に出し、「女踊り」では内輪に出しながら行進していく。新聞記事では「男踊り」には「個人芸」、女踊り」には「一糸乱れぬ」という形容句が用いられ、踊りの所作もタイミングもぴったりと揃える集団舞踊としての特徴が、「男踊り」より「女踊り」により明確である現状と一致している。

表2 「徳島市阿波踊り」の特徴（2016年）

項目	内容
祭りの日程	毎年8月12日から15日（8月11日は屋内ホールにて前夜祭）
場所	徳島市を中心とした6カ所の屋外演舞場と2カ所の屋内ホール
主催	徳島市観光協会・（一般社団法人）徳島新聞社
連の構成	お囃子隊と踊り手・数十人～300人
踊りの様式	様式化（「男踊り」・「女踊り」）、統一化された集団舞踊
お囃子楽器	三味線・鉦・笛・太鼓など和楽器による生演奏
衣装	浴衣・ハッピー



写真1 「男踊り」  
2015.7.22



写真2 「女踊り」  
2015.7.24



写真3 「女の男踊り」  
2015.7.21

写真1, 2, 3はいずれも阿波おどり会館にて筆者撮影

### Ⅲ. 「女踊り」の確立の経緯と要因

#### Ⅲ-1. 「女踊り」という名称が登場するまで

「阿波踊り」は元来個人芸であり、自由奔放なものであるとされる〔8〕,〔11〕。踊りの様式に特に男女差が認識されていなかった「阿波踊り」に差異が現れたのは、何時ごろからだろうか。古老の話では、「女踊り」は戦後5～10年程の間に新たに出てきた様式であり、以前は男女ともに現在の「男踊り」に近い動作で踊っていたとされる(朝日新聞徳島支局 1992: 62, 158)。「男踊り」および「女踊り」という名称もなかった。踊りの様式の男女差はこのように1950年代から徐々に生じた可能性があるため、『徳島新聞』の「阿波踊り」に関する記事(1960年代)から踊りの名称および表現を抽出し表3にまとめた。1950年代までは、「男(性)の踊り」、「女(性)の踊り」、「娘さんの踊り」など、踊り手自身の性別や年齢差を表す言葉で表現されている。また表3からわかるように、「男踊り」の名称が現れるのは踊り手が男性の場合ではなく、「男装した女性」の踊りに関する場合であり、「女性が踊る『男踊り』」として用いられている。これは踊り手の性差により踊りの動作にも男女差が生じたこと、男性の場合は従来と同じ動作であるために命名の必要が認識されないこと、男装の女性に対して初めて「女踊り」ではない従来の踊りの命名の必要が生じたからではないだろうか。また1967年の記事では踊り手自身の性別を表す「男の踊り」および「女の踊り」という表現と、確立した様式を表す「男踊り」および「女踊り」という表現が混在している。踊りに付せられた形容句に着目すると、「男の踊り」には「ほとぼしるような力強さ」、「女の踊り」には「こぼれるような色気」と踊り手の性差による雰囲気を示す表現がある。さらに「男踊り」には「ダイナミックな」、また「女踊り」には「静かな」という対比的な形容句がついている。すなわちここでは、男性と女性の踊りが単に踊り手の性差により醸し出される踊りの雰囲気だけではなく、対

比的な所作の様式化された踊りとして表現されている<sup>5</sup>。

#### Ⅲ-2. 「女踊り」が確立した要因—女性の踊り手への眼差しの変化

「女踊り」は観客の目がつくりだしたとされる。すなわち、観光客が女性の踊り手による踊りを単に「阿波踊り」として見るのではなく、「女性が踊る踊り」として見る視線が「女踊り」という「男性の踊り」とは別の様式を創りだしたと考えることができる。そこで、1946年(戦後初の「阿波踊り」)から現在までの「女性の踊り手」に対する眼差しの変化を、主に徳島新聞の「阿波踊り」関連の記事より考察する。

「阿波踊り」は、老若男女誰でもが踊れることに特徴があるとされていた。例えば1950年8月29日付の『徳島新聞』では、「満月に踊る! 歓喜の大群像」という大見出しと並んで、「老婆や三つの稚児さんも」という小見出しが、高齢女性と幼児が踊る写真につけられている。しかし高齢女性を取り上げられるのは1955年ぐらいまでで、以後はほとんど記事に取り上げられていない。そして、「踊る阿波娘」(若い女性と少女が踊る写真の見出し)(1967.8.18)、「工場内で踊る東邦連の娘踊り子たち」(企業連の写真のキャプション)(1967.8.18)、「阿波娘男踊りですべり出し 徳島駅前で」(若い女性達が徳島駅前で踊る写真のキャプション)(1969.8.15)など、「阿波娘」および「娘踊り子」という名称で、10代後半から20代と思われる女性が多く取り上げられていく。民俗学者の宮本常一は、1967年発行の著書で「阿波踊り」について、「長い間この踊りを踊ってたのしんで来た老人が踊りを奪われてたのしみがなくなったと話していた」と記している(宮本 1967: 201-202)。これは、連における女性の踊り手が40代以下の比較的若い世代中心となり、気軽に小規模の集団を作って踊る場がなくなっていた状況が背景にあると考えられる<sup>6</sup>。徳島新聞の「阿波踊り」関連記事において高齢女性を取り上げられなくな

表3 『徳島新聞』における踊りに関する表現

年月日	踊りに関する男女の性差を示す表現
①1963.9.1	「これぞ陶醉境。よろこびを全身に爆発させてお嬢さんの男踊り」
②1965.8.21	「男踊りはわたしの得意、ぐっといなせ? な女ぶり」
③1966.8.16	「東新町の通りを女性踊り子が男踊りで目を引く」
④1967.8.11	「ほとぼしるような力強さをみせる男の踊り、編み笠のかげから、けだしから、こぼれるような色気をみせる女の踊り」
⑤1967.8.15	「静かな女踊りとダイナミックな男踊り」

①—③はいずれも「着流しを着て踊る女性のキャプション」であり、④は「標準的な衣装の男性と女性の写真のキャプション」、⑤は選抜阿波踊り大会(屋内舞台)に関する記事

ることと、踊りたい高齢女性が踊る場を失っていくことは連動しているといえるだろう。

では『徳島新聞』紙上の「若い女性の踊り手」において着目されたのはどのような面だろうか。それは、ピンク色のけだし（着物の下に着る腰巻）の「あだっぼさ」（1962.8.14）や「こぼれるような色気をみせる女の踊り」（1967.8.11）などの表現から、女性のセクシュアリティであることが見出される。1965年から始まった「ミス阿波踊り」（年間10人）の選定は、そのような「女性の踊り手に対する眼差し」の集約といえるだろう。「ミス阿波踊り」に選定されると「選抜阿波踊り大会」でお披露目され、様々な対外的イベントで「阿波踊り」の宣伝隊となる。例えば1968年に「ミス阿波踊り」になった「うずき連」の連員は、テレビ出演をし、関西まで遠征してホテルのイベントに参加している（うずき連 1998：52）。つまり若く美しく踊りの上手な踊り手は「ミス阿波踊り」として県外に遠征し、全盛期であったテレビ放送等のメディアに頻出する機会を持っていた。

「女性の踊り手」に女性としてのセクシュアリティが着目されるようになったのは、「阿波踊り」が元々花街の文化という側面を持っており（三好 1980：235）、かつ観光政策において、「県外へくる宣伝隊などはたいい芸者衆ばかり」（『徳島新聞』1954.8.15）とされる程に、芸妓が阿波踊りキャラバン隊として県外に派遣されたことによる影響が大きい。また戦後の徳島新聞には、作家、画家、写真家等のいわゆる文化人による「阿波踊り」に関する対談や評論が掲載され、その中でたびたび若い女性の踊りにおける「色っぽさ」、すなわちセクシュアリティに言及されている。すなわち県外客にとっては「阿波踊り」における女性の踊り手は芸妓のイメージであり、女性らしさやセクシュアリティを見出す対象であった。

「阿波踊り」の観光化が進みメディアにも盛んに取り上げられるにつれ、このような県外客の視線が「阿波踊り」の踊り手にも影響していった。特に1960年代後半の高度経済成長期において「阿波踊り」が頻繁にテレビ等のメディアに登場するようになると、踊り手自身が「見られる」意識を持つようになったと考えられる。それは、「踊り子みんながスターになれる舞台や演舞場で、見られる快感」（ゑびす連 1999：34）という言葉に端的に示されている。踊り手は観客に見られるだけでなく、被写体となったことを意識するようになった。例えば女性の踊り手が下駄の爪先を立て、遊脚を支持脚に沿わせるようにして上げるようになったのは、足元を頻繁に撮影されるようになり、足運びを美しく見せたいという意図からだと言われる（[2]）。ある18歳の女性の踊り手は、「足の上げ方、女らしい足の表情をと鏡に写して毎日研究

中。」であるとしている（『徳島新聞』1983.8.13）。男女で踊りの所作もそれ程大きな違いはなかったとされていた「阿波踊り」が、女性の場合は足を内輪に保持し男性の踊りと対照的になったのは、芸妓を用いての観光宣伝、女性の踊り手に若さや美しさやセクシュアリティを見出す視線、戦後のメディアの発達などの要因により、踊り手自身の意識が変化したことによると考えられる。

この女性の踊り手に対する視線を前提として、次項では「女の男踊り」が着目され台頭する経緯と要因を論じる。なお「女踊り」が現在のスタイルになるまでには、流行の音楽やダンスおよび美意識の変化の影響を受けいくつかの段階的変遷を経ているが、これについては本論では言及しないこととする。

#### IV. 「女の男踊り」の台頭とその要因

「女の男踊り」は、女性の踊り手が「ハッピー」あるいは「着流し」を着て「男踊り」の所作で踊る踊りである。女性の男装は、明治政府が打ち出した「違式註違条例」においても、昭和初期の観光政策においても禁じられた。それにも関わらず大正期の「阿波踊り」の写真には、「ハッピー」や「着流し」を着て、すなわち「男装して踊る女性」が見出される。戦後は、たびたび『徳島新聞』紙上で好意的に取り上げられている。中でもいくつかの連の「ハッピー」を着て踊る女性が1970～1980年代に人気となった。さらに「娯茶平」が数十名という多数の女性が鮮やかな配色のハッピーを着て「男踊り」をするグループを前面に打ち出し着目されたことが契機となり、多くの連が1つのパートとして取り入れ、「女ハッピー踊り」と呼ばれるようになった。「女ハッピー踊り」は、「男踊り」および「女踊り」のような様式の確立した踊りとは言えないが、女性がハッピーを着て「男踊り」をするパートを表す名称として用いられており、本論でもこのパートの名称として用いる。

本項では、男装の女性に対する視線の変容をたどることにより「女の男踊り」が人気となり台頭した要因を分析し、さらに女性が「ハッピー」を着て踊るスタイルが、「男踊り」および「女踊り」に匹敵する1つのパートとして前景化された経緯をたどる。

##### IV-1. 女性の男装に向けられる視線の変化

明治政府は、男性の女装と共に女性の男装を禁じていた。特に女性の男装は明治後期の新聞紙上でも、「若い女の美空で印袷纏に短い半股引、肉付き豊かな太股まで露出して飛び廻る」（『徳島毎日新聞』1901.8.31）と批判され、大正期の新聞紙上においても、「猿股一つに短い法被で女と

して見られて恥とする胸部や大腿部まで露わし劣情を起さしむるが如き扮装」（徳島日日新聞社 1919.7.27）と断罪されている。この頃の女性の男装とはどのようなものであったのだろうか。大正期から昭和初期の写真では、男装する女性は、娼妓、芸妓、カフェの女給が多い（徳島新聞社 1980：86, 70）。すなわち男装する女性は、女性のセクシュアリティを商品とする職業に従事することが多かった<sup>7</sup>。これは、現在の「女の男踊り」に女性のセクシュアリティを見出す視線の基層になっていると考えられる。

男装する女性に対する視線は、戦後大きく変わる。『徳島新聞』における「男装の女性」の写真のキャプションは、「これぞ陶酔境。よろこびを全身に爆発させてお嬢さんの男踊り」（1963.9.1）、「男踊りはわたしの得意、ぐっといなせ？な女ぶり」（浴衣にハチマキの女性）（1965.8.21）と好意的な視線や、女性の「男踊り」にある美意識を見出す視線に代わる。さらに胸に巻いたサラシについて「色気がにおう」（1976.8.13）、「女踊りにはないお色気」（1979.8.13）、「健康的なエロチシズム」（1988.8.15）、「太ももがまぶしい」（1994.8.12）など、男装して「男踊り」を踊る女性の所作や身体の露出性にセクシュアリティを見出す視線になっていく<sup>8</sup>。象徴的な記事は、「男踊りの阿波女」という大見出しの「男踊り」の女性の特集である（1970.8.16）。この記事では、複数の連から「着流し」や「ハッピー」を着て「男踊り」をする5名の女性が、大写真（身体の3サイズ付）と共に紹介されており、男装の女性に身体のセクシュアリティを見出す好意的な視線が明らかである。

大腿部を露出することに対する視線の変化は、どのような要因によるものであろうか。明治政府による女性の男装禁止令が効力を喪失して久しく、低俗とされた民俗芸能に対する価値観の転換が根底にあると言えるだろう。直接には1960年代にパリおよびロンドンでミニスカートが発表されてから日本を含め世界的な流行となり（崎田 1990：1）、女性の開放感を促し（鈴木ほか 2015：54）、1967年に「ミニの女王」と呼ばれたツイギー（イギリスのモデル）が来日し人気を博したことが拍車をかけたと言えるだろう。「女として見られて恥とする胸部や大腿部」（既出）という女性の身体の露出に対する意識が変容したのである。

#### IV-2. 「女ハッピー踊り」の前景化

前項では、男装の女性に対する視線の変容がメディアにどのように反映されているかを分析し、視線の変容を「女の男踊り」の台頭と関連づけた。では「女の男踊り」の中でも、ハッピーを着て踊るスタイルが1つのパートとなり「女ハッピー踊り」と呼ばれるようになるまでにはどのような経緯が

あるのだろうか。ハッピーを着て踊る女性は、1970年代より、「葵連」、「悠久連」、「野村証券連」などの例が『徳島新聞』紙上で見出だされ（1970.8.16, 1974.8.16, 1979.8.13）、特に「葵連」が多く取り上げられている。当時を知る人の記憶でも、早期から目立っていたのは「葵連」の女性のハッピー姿であったという（[8] [11]）。実際に（1978～1986年）「葵連」に所属していたS氏（女性）によるとこのスタイルはとても人気があり、S氏も初めは「女踊り」であったが、2～3年後にハッピーを着た「男踊り」に替わった [13]。これに対し女性が着流しを着て「男踊り」をする例も『徳島新聞』紙上に散見されるが、ハッピーの例の方が頻出している。すなわち1970年代は男装の女性が着目され、中でも「ハッピー」を着た女性による「女の男踊り」が台頭した時期であったと考えられる。しかし「男踊り」および「女踊り」のような統一的な名称は見いだされず、「娘っ子の男踊り」（1974.8.16）、「ハッピー姿の男踊り」（1979.8.13）、などと表されている。写真ではハッピー着用の男性に混在して踊っている例が多い。1980年代前半には「えびす連」および「天保連」がハッピー着用の数名の女性による「女の男踊り」を隊形の前面に取り入れ人気となり、女性による「男踊り」が増加した（朝日新聞徳島支局 1992：21-23）。しかし、少人数のハッピー姿の女性を先頭に出すことによるアトラクション的な意味合いが強かったと考えられる。

現在の「女ハッピー踊り」では「娯茶平」がその規模の大きさに際立っている。「娯茶平」では1980年代に、数名ではなく数十名規模（2015年：46名）のハッピーを着た女性を一つのパートとして打ち出した。「娯茶平」には次世代育成のための「ちびっこ踊り」（小学生以下の男女がハッピーを着て「男踊り」をする）という人気のパートがあったが、女子が卒業時にこのまま「男踊り」を続けたいという希望が多く、連長が着想して艶やかな50色使いのハッピーを着て「男踊り」をするグループを前面に打ち出した（[3]）。すなわち、多人数の女子に鮮やかな揃いの衣装を着せ、「男踊り」および「女踊り」に並列するパートとしてプロデュースしたことが、従来の「女の男踊り」とは異なる新たな展開となった。これは大規模で人目を引く衣装による「前景化」が行われたとみることができ、ハッピーを着た女性による「男踊り」が「女ハッピー踊り」として1つのパートとして認識されるようになったのは、この「前景化」によるものと考えられる。

「阿波踊り」は戦後に女性の踊り手による「女踊り」という様式が生まれたことにより、男性の踊り手による「男踊り」と「女踊り」という2つの様式が確立した。また観客を飽きさせないため

に、各々のパートを組み合わせていろいろな隊形（フォーメーション）を組む集団舞踊となった。「女ハッピー踊り」のような新たなパートの形成は、フォーメーションの構成において新趣向が打ち出せるという利点がある。これは、ハッピーを着た女性の集団が1つのカテゴリーとなり「女ハッピー踊り」と呼ばれるようになった一つの要因といえるであろう。ハッピーを着て踊っていた小学生が、そのまま色彩やデザインの鮮やかなハッピーで「男踊り」を続けるのはスムーズな移行であると同時に、踊り手にとっても晴れがましいことでもであろう。また観客にとっても、若い女性が鮮やかで露出性の高いハッピーを着て踊ることは、きっちりとした着付けの「女踊り」にはない魅力があるものとして、人気となった。踊り手にとっても「男踊り」の所作だけでなく、観客およびメディアからの注目が魅力となった。また『「女踊り」に比べて衣装の着脱が楽で軽い』（[4]）『「女踊り」よりも長く踊り手でいられる』（[6]）など「女踊り」とは異なる魅力があるパートとなった。

#### IV-3. 「女ハッピー踊り」が表象するもの

「女ハッピー踊り」の踊りの所作は「男踊り」であるが、「男踊り」によく使われる「自由奔放」「力強い」「個人芸」という表現は使われない。よく用いられるのは、「女踊りにはない色気」という表現である。これは、衣装に起因する身体の露出性から言われる表現であるが、「女ハッピー」の所作が、実際には「男踊り」とは異なっていることが基底にあると考えられる。「女ハッピー踊り」は「男踊り」と同様に足を外輪に出す所作ではあるが、「男踊り」程大きくは外に出さず、「男踊り」程のダイナミックさはない。「女ハッピー踊りは手のしなやかさなど、『男踊り』とは違う。」（[7]）や、『「女ハッピー踊り」は『男踊り』とも『女踊り』とも言えないので、取り入れていない』（[10]）という言葉からもわかるように、「女ハッピー踊り」は「女性が踊る『男踊り』」とは異なるものと認識されている。「みやび連」の初代連長（「着流し」を着て「男踊り」を踊る女性）は、ハッピーを着て「男踊り」をする女子中学生（13歳）の連員に、「ただ男の子のマネをするのではなく、女性の領域を抜けていない男踊りを工夫してもらいたい。色気らしい色気を出すのは無理でしょうが。表情がはっきり見えるので常に笑顔を。」（『徳島新聞』1982.8.12）とアドバイスしている。ここからも、「女ハッピー踊り」はあくまでも女性が、セクシュアリティを含めての女性らしさを表現するものと認識されていることがわかる。

「女ハッピー踊り」を踊る女性は、どのような点に魅力を感じているのだろうか。「自由奔放な表現力」（徳島出版 2007：81）や「自分らしさを出

せる」（同上：31）という踊り手側の言葉には、「一糸乱れぬ」と形容される程に統一性が重視される「女踊り」とは別の、個人芸とされる「男踊り」本来の魅力を感じていることがわかる。しかし、『「男踊り」そのものが現在のはかなり統一的になっており、個人芸とは言い難い』（[4]、[11]、[12]）ともいわれ、筆者の公演観察でも同様である（[1]、[5]）。「女ハッピー踊り」も統一性が求められる場面が多い [1]。それでも、終始手先から足先まで揃えることが重視される現在の「女踊り」よりは、個性が発揮できる場面があるということだろう。またある中学生は「男踊り」を選んだ理由を、「この方が目立って写真にも撮られやすい」（徳島新聞 1982.8.12）としている。「女ハッピー踊り」が大変目立つことに魅力を感じている踊り手が多いということであろう。

女性の男踊りについて、あくまでも「男踊り」本来の美学を認識している連もある。「東京新のんき連」では、「ハッピー」ではなく「着流し」を着て、女性が男性と共に「男踊り」をしている。この連の踊りのリーダーは徳島市出身の若い（30代）女性であり、踊り歴40～50年というベテラン達のような、お囃子のリズムとの微妙な間の味わいが感じられるような「男踊り」を目指しているという（[9]）。事実、練習や公演での「女の男踊り」は、足を外輪に大きく出し、腰もかなり低く保ちながら踊っており、「女ハッピー踊り」とは明確な差異が感じられる。この場合衣装を「ハッピー」ではなく「着流し」にしているのは、「ハッピー」にすると女性としてのセクシュアリティを表現する「女ハッピー踊り」になってしまうため、「男踊り」本来の真髄や醍醐味とは異なるものになってしまうからと考えられる。

#### V. まとめ

ジェンダー性の希薄であった「阿波踊り」は、昭和初期の観光政策により芸妓が起用され、女性の踊り手には女性としてのセクシュアリティが見出されるようになった。戦後は観光名物としてメディアにも頻繁に取り上げられるようになった。踊り手も「見られる踊り」としての意識が働き、女性の踊り手は女性らしさを見出す視線の影響を受け女性らしい所作を目指すようになった。やがて踊り手の性差による踊りの動作の差異化が進み、「男踊り」と「女踊り」という様式が確立した。一方で男装の女性に対する視線は、明治政府が女性の男装を禁じたことや、芸妓や娼妓による男装が多かったため、新聞には批判的に取り上げられ、観光政策の初期にも禁じられた。しかし戦後はこれらが形骸化し、ミニスカートの流行により女性が太腿を出すことへのタブーも希薄となり、新聞

にも好意的に取り上げられるようになった。さらに鮮やかな揃いのハッピーを着て「男踊り」を踊る集団を1つの集団としてプロデュースした連が登場し、人気を博した。これが集団舞踊としての「阿波踊り」において「男踊り」および「女踊り」に並ぶ一つのパートとして位置づけられ、「女ハッピー踊り」と呼ばれるようになった。

本論は一つの民俗舞踊の約100年間の変容を、ジェンダーに関する様式化という観点より考察した。変容の大きな要因は観光政策であるが、メディアの発達も大きな影響を及ぼしていることが見出された。「阿波踊り」はジェンダー性という視点から見ると、男女が衣装および踊りの所作において明確に区別されている。これは、現代の舞踊における性差の希薄化という潮流において、特異点となっている。

「女ハッピー踊り」の登場は、「男踊り」をやってみたくてという女性の潜在的なニーズを満たす。一方、きっちりと着物を着付けて踊る「女踊り」に「上品なお色気」(『徳島新聞』1962.8.16)を、「女踊り」より身体の露出が大きい「女ハッピー踊り」に、「女踊りにはないお色気」や「健康的なエロチシズム」を見出す表現は、いずれも「男性の観客」が「女性の踊り手」に持っている視点であり、抑制的および非抑制的なセクシュアリティである。すなわち、「女ハッピー踊り」は「女踊り」と相互補完的セクシュアリティを表現するものと捉えられている。このように「女ハッピー踊り」は、踊り手および観客双方のニーズを満たしている。また、現在の集団舞踊としての「阿波踊り」が必要とするパートのバリエーションを提供する。このように「阿波踊り」における「女ハッピー踊り」は、女性の踊り手にセクシュアリティを見出す視線の形成、女性の男装や身体の露出をタブーとする意識の低下、パートごとにフォーメーションを組む集団舞踊化という複合的要因において前景化されている。

## 注

- 1 「阿波踊り」は1930年代の徳島市の観光政策において用いられるようになった名称であるが、本論では命名される以前の徳島市の盆踊りに関しても「阿波踊り」とする。
- 2 例えば1800年(寛政12)には、阿波から十八万俵近くの藍が日本全域に出荷され、利益は二十七万両に及び、これら藍大尽といわれる商人が上方のはやり歌の阿波への流入にも寄与した(檜 1982: 137)。
- 3 明治5年および翌年に布告された「東京府違式註違条例」および「各地方違式註違条例」は、明治初期の日本社会と当時の庶民の生活を大きく規制し意図的に方向づけた(春田 1994: 33)。異装は、「各地方違式註違条例」で禁じられている。これは、欧米人に対して恥ずかしくない形に民衆の風俗を矯正しようという意図があった(三橋 2015: 129)。小寺は「阿波踊り」を「風流(踊)」の名残としており(小寺 1922: 口絵写真)、服部は「風流踊」の

特徴を、「異風異形で踊り狂うこと」としている(服部幸雄 1992: 68)。「風流」は、「風情・みやびなどの意味で、中世に物語や和歌の心を意匠化したつくりものを指したが、後にきらびやかな造り物や衣装、それらを用いた練り物や踊りをも指すようになった(文化庁 1976: 23)。明治大正期の「阿波踊り」では女性の男装および男性の女装が非難すべき対象として新聞紙上に挙げられており(三原 1976: 41, 45, 74)、現代における「女の男踊り」も「風流」の系譜上のものと捉えることができる。ただし、現代においては男性の女装は見出されないなど、風流(踊)からつながる単一的な系譜のものとは割り切れない面もある。この点および現代社会におけるトランスジェンダーの表象としてどのような位置づけができるかは、今後の研究課題としたい。

- 4 「女ハッピー踊り」および「ちびっこ踊り」はすべての連が取り入れているわけではない(阿波踊り情報誌『あわだま』編集部 2015: 32-97)。「阿波踊り」の2大組織(「阿波踊り振興協会」および「徳島県阿波踊り協会」)に所属する「有名連」と呼ばれる33の連の内、「女ハッピー踊り」を取り入れているのは16連である(あわ編 2015: 32-97)。
- 5 同年封切りの映画「喜劇団体列車」(1967.11.12公開 瀬川昌治監督)に徳島ロケの場面で「阿波踊り」(葵連)が映されており、この映像からも女性の踊りが男性の踊りとは明確に異なり、腰を落とさず下駄のハマを立て、足運びが内輪になっていることがわかる。
- 6 宮本は、「市は市民が勝手気ままに踊ることをとどめ、服装を一定し、また踊るグループをつくらせて、その認可したものにのみ踊らせることにした。」と記している(宮本 1967: 202)。基準に合致しない集団も演舞場(審査場)以外では踊ることができるはずであるが、実際には演舞場(審査場)に人々が集中する状況下ではそれ以外の場所では踊りにくくなったと考えられる。さらにその後は女性の低年齢化が進み、1992年発行の『阿波おどりの世界』では、「ほとんどの連が、中、高生を主体にする女踊り」(朝日新聞徳島支局 1992: 63)と記述されている。筆者によるインタビューでも40代以上の女性は少なく例外的とされていること [8], [11]、5つの連の練習の参与観察からも、いずれも「女踊り」のリーダーは20代~30代前半であることから、主力は10~20代と考えてよいであろう。
- 7 最も直截的な例は、コン・ヒロシ(徳島市出身の漫画家)が「SY松竹(徳島市)」のストリップ嬢が楽団を引き連れ、男物の浴衣に男のパンツ、あらわな胸にスパンコールをつけて踊っていた。それは人気があった。(1989.8.12 徳島新聞「トリオ座談会」)と語っているように、男装のストリップ嬢が踊っていたことであろう。
- 8 ただし、近年は身体の露出性に言及した表現は減少し、「躍動感あふれる」(2009.8.12)や「さわやかな色気と粋な動き」(2009.8.15)など、所作を含めての「女ハッピー踊り」の総体的な表象性に言及する表現に変わってきている。これは社会においてセクシュアルハラメントなどの倫理観が広まり、メディアにおける表現にも反映されているからであろう。

## 引用文献

- ・朝日新聞徳島支局, 1992, 『阿波おどりの世界』, 東京: 朝日新聞社
- ・阿波踊り情報誌「あわだま」編集部, 2015, 『阿波踊り本II』, 徳島: 猿楽社
- ・坂東裕介ほか, 2007, 「阿波踊りにおけるパフォー



- マンス空間の変容に関する研究』、『都市計画. 別冊, 都市計画論文集』42 (3), 日本都市計画学会, 31-36
- ・文化庁監修, 1976, 『日本民俗芸能事典』, 東京: 第一法規出版
  - ・ゑびす連, 1999, 『ゑびす連50周年記念』, 徳島: ゑびす連
  - ・春田国男, 1994, 「違式註違条例の研究」, 『別府大学短期大学部紀要』No.13, 大分: 別府大学短期大学部, 33-48
  - ・服部幸雄, 1992, 「変身憧憬」, 『変身する 仮面と異装の精神史』, 国立歴史民俗博物館編, 東京: 平凡社, 61-110
  - ・檜瑛司, 1982, 「徳島の民俗芸能」, 『徳島の研究 第7巻民俗篇』, 石躍胤央/高橋啓編, 大阪: 清文堂出版, 100-146
  - ・加藤重成, 1894, 「阿波徳島市の盆踊」, 『風俗画報 第七十七弾』, 東京: 東陽堂, 14-15
  - ・川内由子, 2006, 「『阿波踊り』と『三原やっさ踊り』の相関性・相違性: 踊る側からのアプローチ」, 『表現文化研究』6 (2), 神戸大学表現文化研究会, 141-153
  - ・小寺融吉, 1922, 『近代舞踊史論』, 東京: 日本評論社出版部
  - ・松本進, 1980, 『阿波踊り』, 徳島: 徳島市観光協会
  - ・三原宏文, 1976, 『阿波おどり実記』, 発行人: 三原武雄
  - ・三橋順子, 2015, 『女装と日本人』, 東京: 講談社
  - ・宮本常一, 1967, 『宮本常一著作集 第2巻 日本の中央と地方』, 東京: 未来社
  - ・三好昭一郎, 1980, 「徳島藩と阿波おどり」, 『阿波おどり』, 徳島: 徳島新聞社, 167-242
  - ・中野好夫, 1985, 『主人公のいない自伝 ある城下市での回想』, 東京: 筑摩書房
  - ・崎田喜美枝, 1990, 「世界のファッション情報」, 『宝塚造形芸術大学紀要』4, 宝塚造形芸術大学, 25-46
  - ・下川耿史, 2011, 『盆踊り 乱交の民俗学』, 東京: 作品社
  - ・鈴木直恵ほか, 2015, 「若年層女子の脚部のファッションスタイルと靴下の関係」, 『繊維製品消費科学』56 (2), 繊維製品消費科学学会, 155-162
  - ・徳島毎日新聞社, 徳島: 徳島毎日新聞社  
1901.8.31, 朝刊3面, 「徳島の真夜中」  
1936.8.29, 朝刊3面, 「踊れ! 踊れ!!」
  - ・徳島日日新報社(原資料の出版社), 徳島日日新報, 高松: 四国工業写真  
1919.7.27, 朝刊3面, 「下劣な事は磨めて貰ふ」
  - ・徳島出版, 2007, 『徳島グラフ』, 徳島: 徳島出版
  - ・徳島新聞社, 1980, 『阿波おどり』, 徳島: 徳島新聞社
  - ・徳島新聞社, 徳島新聞, 徳島: 徳島新聞社  
1950.8.29, 朝刊2面, 「満月に踊る! 歓喜の大群像」  
老婆や三つの稚児さんも  
1954.8.15, 朝刊3面, 「エライヤッチャエライヤッチャ」  
1962.8.14, 朝刊1面, 「おとこ踊り」  
1962.8.16, 朝刊4面, 「踊りのなかの阿波ムスメ」  
1963.9.1, 朝刊5面, 「初日から踊り一色」  
1965.8.21, 朝刊5面, 「せき切って初日の興奮」  
1966.8.16, 朝刊8面, 「競う阿波っ子の情熱」  
1967.8.11, 朝刊11面, 「阿波踊り テレビロケは本番」  
1967.8.18, 朝刊1面, 「踊る阿波娘」  
1969.8.15, 夕刊1面, 「阿波娘 男踊りですべりだし」  
1970.8.16, 朝刊12面, 「熱気ぶつかると初踊り」  
1974.8.16, 朝刊14面, 「どっと見る人 踊る人」  
1976.8.13, 朝刊13面, 「待ってたハッスル」  
1979.8.13, 朝刊5面, 「跳んで! 跳んで! 跳んで!」  
1982.8.12, 朝刊13面, 「ちびっこギャル 男踊りが最高よ」  
1983.8.13, 朝刊16面, 「踊り子自慢」

- 1988.8.15, 朝刊10面, 「乱舞あでやか阿波女」
- 1989.8.12, 朝刊3面, 「トリオ座談会」
- 1994.8.12, 特集8面, 「私も踊りたい」
- 2009.8.12, 朝刊31面, 「'09 阿波踊り 夏輝く 待ち望んだ」
- 2009.8.15, 朝刊1面, 「美と技 本調子」
- ・うずき連, 1998, 『うずき連40年のあゆみ』, 徳島: 娯茶平

## 映像資料

- ・東映, 2006, 「喜劇団体列車」, 東映ビデオ